

「低ナトリウム血症の治療における腎臓内科介入の意義」 に対するご協力をお願い

研究責任者 畔上 達彦
研究機関名 慶應義塾大学医学部
(所属) 腎臓内分泌代謝内科学教室

このたび当院では上記の医学系研究を、慶應義塾大学医学部倫理委員会の承認ならびに研究機関の長の許可のもと、倫理指針および法令を遵守して実施します。

今回の研究では、同意取得が困難な対象となる患者さんへ向けて、情報を公開しております。なおこの研究を実施することによる、患者さんへの新たな負担は一切ありません。また患者さんのプライバシー保護については最善を尽くします。

本研究への協力を望まれない患者さんは、その旨を「8 お問い合わせ」に示しました連絡先までお申し出下さいますようお願いいたします。

1 対象となる方

西暦 2014 年 1 月 1 日から 2024 年 6 月 30 日までの間に、血清ナトリウム 120 mEq/L 以下となった患者さん。

2 研究課題名

承認番号 20241180

研究課題名 低ナトリウム血症の治療における腎臓内科介入の意義

3 研究組織

研究機関

慶應義塾大学病院

研究責任者

(職位) 専任講師 (氏名) 畔上 達彦

共同研究機関

東京都済生会中央病院

研究責任者

(職位) 部長 (氏名) 小松 素明

4 本研究の目的、方法

低ナトリウム血症は、電解質異常の中で最も頻度が高く、さまざまな病気でみられます。特に血清ナトリウム 120 mEq/L を下回る重症低ナトリウム血症は、生命を脅かす深刻な電解質異常であり、この状態では、けいれんや昏睡などの重篤な神経学的症状が出現し、適切な管理と治療が不可欠です。しかし、この治療法に関しては未だに最適な方法が分かっていません。

今回我々は低ナトリウム血症の治療において腎臓内科の果たす役割に注目しました。他の領域では腎臓内科の介入が予後改善に繋がるという報告がありますが、低ナトリウム血症においては確たるものはありません。具体的には過去の電子カルテを遡り、低ナトリウム血症の患者さんにおいて腎臓内科の介入のある方とない方をカルテ記載から確認し、どのように治療方法が異なるのか、予後はどのように変化するのかなどを、血液・尿検査などの結果とともに評価させていただきます。

5 協力をお願いする内容

西暦 2014 年 1 月 1 日から 2024 年 6 月 30 日までの間に、血清ナトリウム 120 mEq/L 以下となった方のデータを使用し、腎臓内科介入の有効性するための解析を行わせていただきます。冒頭に述べました通り、新たなサンプルの取得は一切ございません。

6 本研究の実施期間

研究実施許可日～2027 年 3 月 31 日

7 外部への試料・情報の提供

該当いたしません。

8 お問い合わせ

本研究に関する質問や確認のご依頼は、下記へご連絡下さい。

また本研究の対象となる方またはその代理人（ご本人より本研究に関する委任を受けた方など）より、試料・情報の利用の停止を求める旨のお申し出があった場合は、適切な措置を行いますので、その場合も下記へのご連絡をお願いいたします。

実施施設 慶應義塾大学病院 〒160-8582 東京都新宿区信濃町 35

研究分担者：中村彰良 腎臓内分泌代謝内科

連絡先：03-5363-3796

FAX：03-3359-2745

E-mail: akiranakamurakidney@gmail.com

なお、お電話でのご連絡は可能な限り診療時間中[月曜日～金曜日および第 2・4・5 週の土曜日(ただし祝日は除く)、午前 8 時 40 分から午後 4 時 30 分]をお願いいたします。

以上